看護職部門

30年前の少女と一緒に

【宮崎県・竹田栄子（たけだえいこ）】

看護職部門
入選

昭和58年4月。都会からUターンした私は、結核病棟のある小さな個人病院に勤務することとなった。その病棟には16歳のNちゃんが入院していた。はじけんばかりの笑顔とおしゃべりが大好きな、ハイビスカスのような少女だった。また仕事に不慣れな私に、小さな情報をそっと教えてくれる気遣いもしてくれた。

Nちゃんは退院審査会の日をとても心待ちにしていた。その日の夕方、出勤した私は、廊下でばったり出会った彼女に「どうだった？」と尋ねた。目にいっぱい涙をためた彼女は「まだ入院が必要だって。私、高校留年が決定しちゃった」とうつむいた。やがてその声は号泣に変わり、私も一緒に泣いていた。

その後、遅れて高校を卒業したNちゃんは、以前のような明るさを取り戻し、たくさんの面白い話を、外来通院の傍ら、私たちに聞かせてくれた。退院して10年経過したころ、彼女はまた、入院してきた。発熱と咳を伴った症状は繰り返され、状況は少しずつ深刻度を増してきた。

仕事もままならない生活にNちゃんは疲れていた。診断は肺アスペルギルス症。「こんな肺いらない。ずっとずっと苦しかった。もういい。先生に手術お願いして」。泣きじゃくるNちゃんは、あの時以上に痛々しい小さな女の子だった。彼女を抱きしめながら、医師の言葉が胸をよぎった。「手術ができるといいけど癒着が激しいからな」。しかし彼女は手術を選択した。残った肺を大事にしてこの先の人生に賭けると。

あれから20年、当時の病院は閉鎖となり、Nちゃんは別の病院に通院している。時の流れは、彼女を母親へと成長させ、力強く生きることを教えた。45歳となった彼女は、私の勤務する産婦人科に時々検診にやってくる。帰り際「まだ辞めないでね」と必ずそっとつぶやく。「何をおっしゃるNちゃん。あなたと出会って30年。もう少しあなたを見ていたい」。私は笑って、いつも答える。